オーディオ実験室収載

Hi-Res Editor の評価(7)
―編集機能(2)―

１．始めに

前報(6)では DSD 音源の編集機能を確認しましたが、今回は DSD から PCM への変換を含む編集機能を確認します。

２．Hi-Res Editor の編集と試聴方法

プロの現場では、録音された DSD 音源は、いったん PCM 音源に変換した後、編集され、その後に DSD に戻すということがよくやられているそうです。今回は、DSD のまま編集した場合と、いったん PCM 音源に変換して編集し、DSD に戻すことを実施し、音質の変化を確認することにしました。

256sDIFF 音源(①)を選び、最初の音楽が始まる前と音楽が終わった時点の録音現場のノイズをそれぞれ IN ポイントと OUT ポイントを設定して中間の演奏部分を取り出し 256sDIFF 音源(②)とします。

次に同じ 256sDIFF 音源(①)をいったん 384KHz24bitWAV 音源(③)に変換し、この 384KHz24bitWAV 音源について、先ほどと同様に、最初の音楽が始まる前と音楽が終わった時点をそれぞれ IN ポイントと OUT ポイントを設定して中間の演奏部分を取り出し、384KHz24bitWAV 音源(④)とします。その後、それを再び 256sDIFF に戻し 256sDIFF 音源(⑤)とします。

以上の過程で得られた各音源を HDD に収納し、micro iDSD を使用し、次のルートで試聴しました。

PC→HiFi USB →micro iDSD→DA-3000→MYTEK Digital 192-DSD

ここで DA-3000 には ABS-7777 から 44.1KHz のクロックを入力しています。

音質評価のソフトは Hi-Res Editor とし、音質評価は次のような音源を再生してみました。

256sDIFF 音源→256sDSD 再生

384KHz24bitWAV 音源→384KHz24bit PCM 再生

３．Hi-Res Editor の試聴結果

256sDIFF 音源(①)とフォーマット変換なしに編集を行った 256sDIFF 音源(②)はその違いを感じることはできませんでした。しかし、256sDIFF 音源(①)とフォーマット変換を行った 384KHz24bitWAV 音源(③)の音は明らかに異なり、DSD らしい細やかな音楽の表情が後退します。その 384KHz24bitWAV 音源(③)とフォーマット変換

なしに編集を行った 384KHz24bitWAV 音源(④)との違いも感じることはできませんでした。しかしながら、いったん 384KHz24bitWAV にしてから DSD に戻した 256sDIFF 音源(⑤)は、256sDIFF 音源(①)とフォーマット変換なしに編集を行った 256sDIFF 音源(②)とを比べると、256sDIFF 音源(⑤)は、少し 384KHz24bitWAV(③)や 384KHz24bitWAV 音源(④)の音色が混じったように感じられ、元の DSD の音楽の細やかな表現が後退します。

４．まとめ

フォーマット変換せずに編集した場合の音質の変化は認められませんでしたが、DSD から PCM のフォーマット変換を行って編集後に元に戻すと、若干音が変るようです。そういう意味では、DSD のまま編集できる Hi-Res Editor はメリットがありそうです。

以上